

源義朝権力の地域基盤と武士拠点

渡邊浩貴

「義朝力一ノ郎等」鎌田正清と東海地域の場合

MINAMOTO no Yoshitomo's Regional Foundations and Bases of Samurai:
In the Case of KAMATA Masakiyo, Who was the Number One Vassal for Yoshitomo and Tokai Region
WATANABE Hiroki

はじめに

- ① 鎌田正清一族の系譜と活動
- ② 「香貫三条局」の実在をめぐって

- ③ 狩野川流域社会と香貫
- ④ 鎌田氏の本拠と東海地域
義朝の地域基盤とその限界—おわりにかえて—

【論文要旨】

本稿は、源義朝権力を支える地域基盤の形成過程とその特質を、彼の乳母子にして有力な郎等（家人）である鎌田正清の存在形態と東海地域への拠点形成や地域勢力との関係の実相を検討することで、明らかにするものである。これまで彼の動向は、主として軍記物語で知られるばかりで、その実像は未詳な部分が多い。本稿では平安末期から鎌倉前期頃の鎌田一族の動向を事例に検討した。明らかとした要点は大略以下の通りである。

鎌田氏は本来は京武者としての存在形態を有しつつ、駿河国鎌田郷を本拠とし、次第に狩野川下流域の香貫郷にも拠点を持ち、如上の地域基盤をベースにさらには伊豆国北条氏とも交流を持つようになっていく。だが、かかる鎌田氏の地域活動には、駿河国長田荘を本拠とする在来領主長田氏との連携が必要不可欠であった。長田氏は安部川河口部にあつて中世東海道的主要宿駅をその勢力圏に包摂しながら、西方面には知多半島の尾張国野間内海荘に拠点を、また北・東方面には駿河国内だけでなく、甲斐・伊豆地域にも情報網を巡らせていたことが窺える。源義朝は、東海道の長者的

存在である長田氏と郎等の鎌田氏が姻戚関係を結ぶことで、鎌田氏を通じた東海道交通へのコミットを企図したと考えられる。

ただし、上述の義朝が東海地域に形成した地域交通拠点のハブや諸勢力との連携を通じたネットワークは、決して強固なものではなかった。それは、義朝一行が東国への逃避行の途上で逗留した野間内海荘にて、長田父子に謀殺されたことから明らかである。長者など地域諸勢力の実力に依存して結ばれた関係は、彼らとの利害関係の不一致により容易に瓦解する可能性を常に孕み、こうした勢力が基盤とする宿などの流通拠点も決して一枚岩ではなく、多様な勢力が重層的に重なりあい複雑な利害関係を形作っていたのである。一見広範にみえる義朝のネットワークも、その実態は在来勢力たる長者の実力に依拠した皮相的な関係であつたといえる。一方、次代の鎌倉幕府と東海地域交通との関わりは義朝期のそれと一線を画しており、宿駅の新設や在来勢力の排除など、幕府権力による整備が進展していくこととなる。

【キーワード】 源義朝、鎌田正清、長田忠致、東海道、香貫

はじめに

本稿は、源義朝権力を支える地域基盤の形成過程とその特質を、彼の乳母子であり、かつまた有力な郎等（家人）である鎌田正清を事例に、彼と一族の存在形態と東海地域への拠点形成の過程や地域勢力との関係構築の実相を検討することで、明らかにするものである。

鎌倉幕府を創設した源頼朝の実父にして、保元の乱を経て一挙に河内源氏嫡流の武家の棟梁へと駆け上がった源義朝。近年、彼の事蹟は院政期政治史との関わりの中で京武者としての活動実態⁽¹⁾や、東国における地域連携の過程が詳細に知られるようになった⁽²⁾。こうした義朝権力の性格を踏まえ、元木泰雄はその武力編成の特徴を「京周辺の所領を基盤とする性格を脱却し、東国を中心とする広範な地方武士を基盤とする軍事編成に転換していた⁽³⁾」と評する。坂東で生育し一時的に鎌倉を拠点としたことで、義朝は東国武士間の地域紛争に調停者として介入しつつ地域的連携を深め、さらに美福門院・鳥羽院近臣と結びながら所々の莊園形成に関与し、南関東地域で武士勢力を編成しながら山内首藤氏や大中臣氏ら郎等を配置していたことが、野口実によって明らかにされている⁽⁴⁾。これらの研究で、義朝の存在意義は東国における地域紛争の調停者という側面が強調され、またかかる義朝が築いた京―東国間にわたる広範な人的ネットワークの帰結として、保元の乱において武蔵・相模をはじめ東山道・東海道地域を拠点とする多くの東国武士勢力が義朝軍の大半を占めるに至ったことが見通されている。

義朝権力の地域基盤とその実態について、より具体的な考証として、青墓遊女ら地域流通に関わる芸能者との姻戚関係⁽⁵⁾、父源為義以来の河海交通との関係⁽⁶⁾が従来指摘されている。とくに義朝が関与した天養元年（一一四四）の大庭御厨乱入事件に関する研究蓄積は豊富で、同事件で

の義朝権力の評価を国衙行政の掌握とみるか、国衙に集う武士に対して協調姿勢を示した行為とみるかで意見が異なるものの、いずれにせよ地域流通に介入する武士や芸能者と関係構築を図りながら、義朝が東国に一定の勢力基盤を築いていたことは間違いない。しかし先行研究では、保元の乱における義朝の軍事動員を事例に、彼による武力編成の広域性が指摘されるが、そもそも義朝権力の地域基盤がいったいどれほど機能していたのかは未詳な部分が多い。実際、保元の乱で記述される東国十七カ国にわたる義朝の武力編成について、あくまで国家権力によって動員された東国武士を率いたのであって、「義朝は東国武士を独自に上洛させる必要も力量も有さなかった」という評価⁽¹⁰⁾や、義朝軍の実態が京都周辺の武士に依拠していた可能性が指摘されるなど、義朝が構築した地域基盤の実効性と評価についてはなお多くの検討の余地を残している⁽¹¹⁾。

さて、これまでの義朝権力の地域基盤に関する研究は、主に相模国など東国を対象としていたが、他方で、すでに先行研究で挙げられる東山・東海両道の宿長者や遊女と関係を結び、京―東国間における地域交通のいわばハブとなる要衝に関与していたことはあらためて注目される⁽¹²⁾。すでに義朝が美濃国青墓宿の長者一族である遊女大炊との間に娘をなし⁽¹³⁾、さらに遠江国橋本宿の遊女との間には長子義平を、同国池田宿の遊女との間には範頼をもうけている（以上『尊卑分脈』）。先述の保元の乱における義朝軍中に「駿河国には、入江右馬允・藁科十郎・興津四郎・蒲原五郎⁽¹⁵⁾」と、東海道の駿河国興津宿・蒲原宿周辺を本拠地とする興津氏・蒲原氏が参加しており、また入江氏・藁科氏も本拠地周辺に高橋宿や手越宿がある。先学が指摘する、義朝が京・東国で形成した王臣家・在地の武士勢力とのネットワークもさることながら、義朝の東西間の移動や東国での武力編成を踏まえるに、彼が東海地域交通の要衝に築いた人的関係の重要性は、もっと着目されるべきではないだろうか。

源義朝と東海地域の関わりで想起されるのが、彼の乳母子鎌田正清（政清・政家とも）⁽¹⁶⁾ という人物の存在である。正清は「義朝ガ一ノ郎等鎌田ノ次郎正清」（『愚管抄』）と称されるほど義朝に身親しく扈從し、平治の乱で尾張国野間内海荘で長田忠致に謀殺される最期の瞬間も共にしている。正清とその一族に関する諸系図をみるに、例えば備後国地毗荘に西遷した山内首藤氏惣領家に残る貞治三年（一三六四）作成「山内首藤氏系図」⁽¹⁷⁾（写真）では、正清の父鎌田通清に「住駿河」、鎌田正清自身に「北条四郎時政ノ烏帽子父々」、正清の娘に「香貫三条局／鎌倉右大將家」「花山院法印室」とみえる。通清と駿河国、そして正清と伊豆国北条氏との関わりが窺える点や、正清の娘が駿河国香貫の地名を冠して「香貫三条局」と称していた点など興味が尽きない。これら山内首藤氏の諸系図の記載内容を受け、かつて杉橋隆夫は、鎌田正清が駿河国香貫に権益を有し、かつ狩野川を挟んで同地の対岸にある駿河国大岡荘（牧氏所領）、そして狩野川の上流域にある伊豆国北条（北条時政）へと相互に繋がっていた、という重要な指摘を行っている⁽¹⁸⁾。すなわち、狩野川を介して、駿河国香貫（鎌田正清）―駿河国大岡荘（牧宗親・牧の方）―伊豆国北条（北条時政）という地域的な交流が浮かび上がるというのである。杉橋の関心は主に北条時政・牧の方の出自に向けられているが、⁽¹⁹⁾ 如上の指摘のなかであらためて鎌田正清に着目すると、同氏が持つ地域的な広がりには駿河国にとどまらない可能性が出てくる。本稿が「義朝ガ一ノ郎等」鎌田正清を取り上げる所以である。

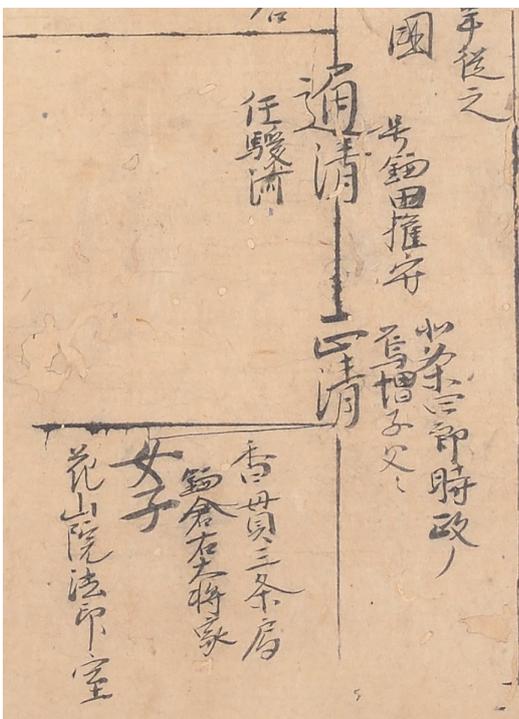
ただし、そもそも杉橋の所論は諸系図の記載内容のみに依拠したものであり、記載内容の信憑性など他の文献史料と併せて検証される必要がある。また、本稿が取り上げる鎌田氏について、『保元物語』『平治物語』での活躍に比して、その実像は史料的制約から未詳な部分が多く、同氏の基礎的な活動形態やその本拠地も確定されていない⁽²⁰⁾。むしろ正清については、「義朝ガ一ノ郎等」以上の評価を与えられてこなかったといえ

よう。しかし、杉橋の指摘を踏まえるに鎌田正清の活動の実相は、我々が想像しているよりも遙かに広い可能性が浮上する。

本稿ではかかる想定を意識しながら、物語のベールに包まれた鎌田正清とその一族を取り上げ、地域社会のなかでの活動・存在形態を明らかにすることで、源義朝権力が築いた地域基盤の実態に迫りたい。

① 鎌田正清一族の系譜と活動

まずは先行研究に導かれながら鎌田正清一族の基礎的事項を確認したい。参考となるのが冒頭でも紹介した同族山内首藤氏の諸系図類である。主に①貞和三年（一三六四）から室町初期頃に成立した「山内首藤氏系図」⁽²¹⁾（『山内首藤家文書』五六八号、同文書群は他にも複数の山内首藤氏関係の系図を所収）、②室町初期頃の成立とされる『尊卑分脉』山内首藤氏の項、③戦国期までの記載がみられる「山内首藤系図」⁽²²⁾（『統群

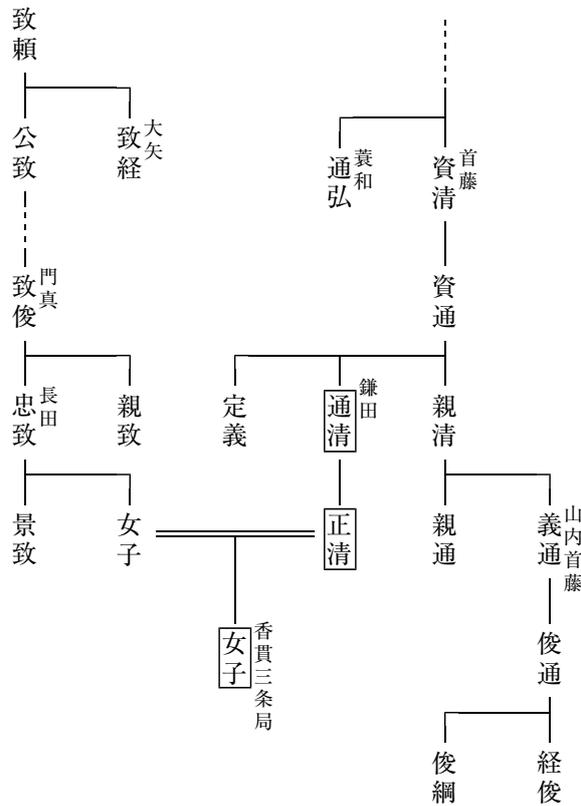


【写真】 山内首藤氏系図
（『山内首藤家文書』五六八号、一部抜粋）

書類従』第六輯上・系図部)の三系統の系図が知られる。上記の系図記載内容を、以下各々【系図A】【系図B】【系図C】として掲出する。これらの系図に加えて、『保元物語』『平治物語』や記録類から、同一族の活動を概観していく。

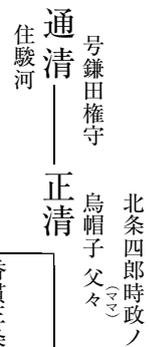
【鎌田正清一族関係略系図】

鎌田正清一族は □ で表記し || は婚姻関係を示す。



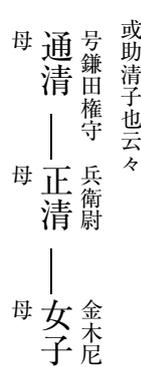
※『尊卑分脈』『山内首藤家文書』所収系図(五六八号)より作成

【系図A】山内首藤氏系図(『山内首藤家文書』五六八号)抜粋

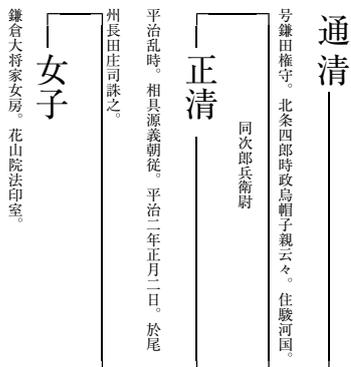


花山院法印室

【系図B】山内首藤『尊卑分脈』抜粋



【系図C】山内首藤系図『統群書類従』抜粋



鎌倉大將家女房。花山院法印室。

(I) 鎌田通清

鎌田氏は、河内源氏嫡流歴代の郎等であった首藤氏の一族で、とくに正清はすでに京武者の一員と評価されている。⁽²¹⁾ 首藤氏の出自は、【系図A】【系図C】でそれぞれ師尹流藤原氏や秀郷流藤原氏などの貴種を襲祖としているが、これは後世での系図操作であり、実際は美濃国席田郡司守部氏という畿内近国の地方豪族なのだろう。野口実の指摘を踏まえながら首藤一族を概観するに、まず源頼義郎等の「みのわ入道」(『発心集』第三「伊予入道往生の事」)が史料上の初見として登場し、この人物は首藤(義和)通弘と考えられる。⁽²²⁾ 通弘は頼義に仕えて京中で生活し、左女牛西洞院に居住していた(『同』)。その後、首藤資通は「藤原の資道は將軍のことに身したしき郎等なり、年わづかに十三にして将ぐんの陣中にあり、よるひる身をはなる、事なし」(『奥州後三年記』下)⁽²³⁾と若干の頃から源義家に仕え、さらに義家の嫡子為義の乳母にもなっている。⁽²⁴⁾ 義家の郎等であった資通は、首藤通弘と同様に京中に居宅を構え在京していたのだろう。資通は承徳二年(一〇九八)に豊後権守に任官している。⁽²⁵⁾ さらに資通の子親清は北面下臈として鳥羽院に祇候する一方、⁽²⁶⁾ 藤原頼長を上卿とする春日祭にも供奉し摂関家にも奉仕している。⁽²⁷⁾ 親清は左衛門少尉にも任官していたことが分かっている。⁽²⁸⁾ 首藤一族は河内源氏歴代の郎等となるなかで京中に居宅を構えて在京し、院や摂関家などの諸権門に奉仕しながら任官していた。首藤氏も京武者としての性格を有する存在といえよう。その後、首藤氏は義通・俊通の時期に相模国山内荘を得て拠点化し、鳥羽院へ寄進を果たしたと考えられており、⁽²⁹⁾ 以後山内首藤氏と名乗るようになる。

首藤資通の子鎌田通清の事蹟もすでに野口実の所論に詳しく、通清が元永二年(一一一九)春の除目で「河内権守」に任じられ、また「従五位下」とあり五位以上の官位を有し、首藤氏と同様に権門への接近が窺える。⁽³¹⁾ ただしその実名について、保元の乱で嫡子の鎌田正清が敵方源為朝の警固する大炊御門御所の西門に赴いた際、「今日の大將軍、下野守殿の御乳母子、鎌田庄司正致が嫡子、鎌田次郎⁽³²⁾と名乗り、保元の乱の頃に鎌田の名字が初めて登場する。また時期は不詳だが、通清は「正致」に改名していたことが窺える。

諸系図を参照するに、すべての系図に通清が「号鎌田権守」した点で一致し、【系図A】【系図C】に通清が駿河国に住したことが記載される。首藤一族から分出した鎌田氏は、通清の代から駿河国に所領を有し、本拠地の地名を採って鎌田の名字を称したと考えられる(なお後述する通り、本稿では同氏の本拠地を駿河国有度郡鎌田郷に比定する)。この「権守」の名乗りについては、国衙の有力在庁として把握するのではなく、野口が指摘する「官名として権守を成功(亮官の制度)によって得たもの」であり、「中央権力との密接な関係を表象するもの」と考えた方が妥当だろう。⁽³³⁾ すなわち「鎌田権守」の名乗りから、河内源氏の郎等であった通清も首藤氏と同様に、院や摂関家の武力として奉仕していた可能性が考えられよう(事実、「河内権守」に任官している)。さらに、『保元物語』で述べられる通清の「鎌田庄司正致」の「庄司」という名乗りにも注目したい。従来、「庄司」は五味文彦によって国衙の在庁職を示すものと考えられてきたが、近年鎌倉佐保は権門の荘園形成に携わった有力武士の呼称と把握する。⁽³⁴⁾ すでに冒頭で触れたように、鎌田氏が仕えた源義朝は鳥羽院権力と結びながら、院近臣の国守と連携して荘園形成に関与しており、相模国では八条院領山内荘や仁平二年(一一五二)の安楽寿院領糟屋荘の立荘に絡んでいる。⁽³⁵⁾ 通清の場合も、駿河国内に鳥羽院関係の荘園形成に携わったからこそ、「庄司」を名乗った可能性が考えられる。義朝が鳥羽院へ接近した時期は、院近臣熱田大宮司藤原季範の娘との間に頼朝が生まれた久安三年(一一四七)頃とされ、仁平二年から院領形成が相模国で拡大していく。⁽³⁷⁾ ちょうど駿

河国でも鳥羽院・後白河院の院庁別当を勤め院近臣集団に属す藤原雅教が久安元年から久寿二年（一一五五）まで国守となつてゐる（『国司補任』³⁸五）。通清の「庄司」は院近臣の国守と連携しつつ院領形成を果した功績による名乗りと把握した方が妥当と思われる。後述する鎌田氏本拠と目される駿河国有度郡鎌田郷の対岸にある安倍川左岸には、八条院領服織荘も存在する（ただし立荘時期は未詳）。上記の関係はあくまで状況証拠による推定でしかないが、本稿では通清の「庄司」の名乗りを院領形成の奉仕で獲得した地位と把握したい。

さて、先に触れた杉橋隆夫の所論では、戦国期までの山内首藤氏の系譜関係を載せる【系図C】に依拠して、通清が北条時政の烏帽子親であるとす³⁹る。だが、それよりも先行する【系図A】では正清を時政の烏帽子親に当てており、その後の備後山内首藤氏に伝来する【系図A】をベースに制作された室町期成立の「山内〈首藤〉氏系図」（『山内首藤家文書』五六九号、ここでは【系図A】と仮称）では、通清を時政の烏帽子親としている。つまり【系図C】の通清の尻付は、【系図A】を踏まえたものと考えられ、より古態の備後山内首藤氏の【系図A】では、正清が時政の烏帽子親であったと認識されていた。ただし、通清自身も「正致」と名乗っていたこともあって、時政の烏帽子親としては通清・正清の両人とも該当する可能性を残し、あながち【系図A】【系図C】の内容を誤記として退けることはできない。

ここでは、京武者首藤氏出身の通清が、京中の居宅に加えて、鳥羽院権力に接近した義朝との政治的動向と軌を一にしなが、駿河国の「鎌田」の地を名字として名乗り、かつこれらの通清の動向を反映するように院権力への奉仕から「権守」と名乗るようになったこと。さらに院領形成に携わったために「庄司」の地位に就いた可能性があること。そしてある段階で「正致」と改名した痕跡があることを確認しておきたい。相模国山内荘の山内首藤氏と同様に、鎌田氏も義朝の郎等でありながら

京武者としての性格を持ち、さらに「鎌田」という地域拠点の形成へ乗り出していたと考えられる。

（2）鎌田正清

正清は鎌田通清の嫡子であり、河内源氏棟梁源義朝の乳母子である⁴⁰。彼の動向のほとんどは軍記物語や諸系図類の記述に頼らざるを得ない。まず、保元の乱における源義朝の軍事動員では、義朝陣中の構成を「相従ふ輩誰々ぞ、鎌田次郎正清・河内源太朝清、近江国には佐々木源三・八島冠者、美濃国には……」⁴¹と記し、他の国出身の武士勢力とは異なる記述がされ、義朝に極めて近い存在であることが分かる。彼自身の在京活動および一族の親清の鳥羽院北面への祇候と左衛門少尉への任官もあって、正清は平治元年（一一六〇）十二月九日の臨時除目にて「政家」と改名し左兵衛尉に任官されている⁴²。これは平治の乱で藤原信頼・義朝が廟堂を制圧した功績によるもので、後白河院権力への軍事的奉仕の結果といえる。彼もまた乳母子であり郎等として常に京中を主要な活動の場としたからこそ、保元・平治の乱で義朝軍の主力を担い続けたのだろう⁴³。正清も父通清同様に、義朝の郎等でありながら京武者の一員であった。

正清の姻戚関係では、平治の乱で義朝とともに京から敗走した際の次の記述が注目される。

【史料1】『平治物語』中「金王丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」抜粋、傍線筆者以下同

去年十二月廿九日、尾張国野間の内海、長田庄司忠宗が宿所へつかせ給ひ候ぬ、此忠宗は御当家重代の奉公人なるうへ、鎌田兵衛が舅^{正徳}なれば、御頼あることはりなり、馬、物具などまいらせよ、急とをらんと仰られしを、子供、郎等、引具して、御供に参り候べきよ

しを申て、且く御逗留有ツて、御休み候べしとて、湯殿浄めて入ま
いらせ候ぬ、鎌田をば舅が許へよびて、もてなすよしにて討ち候ぬ、
其後、忠宗郎等七八人、湯殿へ参り、討まいらせ候しに、宵にうた
れたるをば知召さで、鎌田はなきかと、只一声、仰られて候しほか
り、(後略)

右は、義朝に仕える童金王丸が主人の最期を義朝愛妾の常葉に伝えた
記事内容である。東国へ落ち延びる義朝・正清等主従一行は、正清の
舅で義朝の家人長田忠致が拠点とする知多半島の尾張国野間内海荘を選
び同氏を頼って寄留するも、かえって忠致・景致父子に謀殺されてしま
う。⁽⁴⁴⁾ここに登場する正清の舅長田忠致は、桓武平氏良兼流出身の伊勢平
氏で致経流に属する人物である。致経流は、平安期に同じく伊勢平氏の
維衡流と抗争で敗れた後、伊勢国からその勢力を後退させたことが指摘
されているが、⁽⁴⁵⁾致頼流の一族は「致」を通字とし、「門真」(尾張国葉栗
郡上門間荘・下門間荘か)を拠点とする致俊(忠致父)がみえるなど
〔尊卑分脈〕、徐々にその勢力基盤を伊勢から尾張地域へと移していっ
た。

なお、『平治物語』の第一類本陽明文庫蔵本では、古態本からの増補
として、東国へ落ち延びる義朝・正清等主従一行が東海道の宿々がすで
に敵方の警固が厳重となったため、海上ルートを用いた逃亡を試み、結
果長田忠致の拠点野間内海荘に向かった内容を載せる。次の史料をみて
みよう。

【史料2】『平治物語』下「義朝内海下向の事、付けたり忠致心替りの
事」抜粋⁽⁴⁶⁾

さる程に、⁽⁴⁶⁾頭殿、鎌田を召して、宣ひけるは、海道は、宿々固めて
侍りと言へば、さらば適ふまじ、これより尾張国内海へ着かばやと

思ふは、いかにと宣へば、鎌田申しけるは、鶯栖の玄光と申すは、
⁽⁴⁷⁾大炊が弟なり、古山法師にて候ふが、大剛の者にて候ふ、頼ませた
まへと申せば、金王を御使にて宣ひけるは、(後略)

注目されるのが、美濃国青墓に滞在する義朝から尾張国野間内海荘へ
の移動経路を尋ねられた鎌田正清が、即座に青墓宿長者一族の「鶯栖の
玄光」を紹介し、この人物を介して鶯巢から杭瀬川を下り知多半島の野
間内海荘まで至る義朝の逃走を支えている点である。古態本でも「養老
寺の住僧鶯の巢の源光」がみえ、源光による逃走援助は『吾妻鏡』でも
記録されている。⁽⁴⁷⁾ただし、義朝の東国下向记者に關してはすでに金王丸
の語りに仮託された創作の可能性や逃走ルートの虚構性も指摘されるた
め、⁽⁴⁸⁾記載内容から直截に歴史的事象を掬い上げるには躊躇を覚える。だ
が、仮に義朝の逃避行記事中で鎌田正清の演ずる役回りの重要性が高め
られるという作為が施されていたとしても、正清と長田忠致の姻戚関係
からすると、そもそも彼が京―野間内海荘の交通に知悉していても何ら
不思議ではなからう。また知多半島および伊勢湾の港湾地域を扼する長
田氏所領の立地に鑑みるに、長田氏が海上交通と密接に関わっているが
ため、同氏のネットワークに期待して東国下向を目指す義朝一行が立ち
寄ったことも頷ける。『平治物語』諸本類のなかには長田忠致を「大徳人」
とさえ記すものもある。

多少の誇張および増補はあれども、鎌田正清が尾張地域および港湾部
へ勢力を扶植する有力者長田氏と姻戚関係にあった点は重要であり、そ
うした勢力との関わりがあるがゆえに、物語中で正清が、乳母子という
立場以上に源義朝の逃避行において重要な役割を担ったのである(鎌
田正清と長田忠致との地域的な関係構築については後述)。陽明文庫本
の増補には、さらに正清の妻(忠致の娘)が夫の死を知り、後を追って
自害した内容も載せている。

以上が、諸系図類および『保元物語』『平治物語』などの諸史料でみられる鎌田通清・正清の基本的な動向である。鎌田通清・正清は京武者という性格を有しつつも、遠隔地の地域拠点を新たに持ち、両者に立脚しながら義朝の郎等として在京し、また院権力へ奉仕していたのである⁽⁴⁹⁾。次章からは正清遺児の娘を取り上げながら、鎌田一族の実像に迫っていききたい。

②「香貫三条局」の存在をめぐって

先の【系図A】に登場する鎌田正清の娘は「香貫三条局」と呼ばれ、鎌倉幕府将軍家に仕えていたことが記される。【系図B】でも「金木尼」とのみあるが、「香貫」(カヌキ)と読みが通じるため同一人物と見做してよいだろう。すでに謀殺された正清にとって彼女は諸系図のなかで唯一の残された肉親である。まずは彼女の実在について検証したい。

【史料3】『吾妻鏡』建久五年(一一九四)十月二十五日条

廿五日、壬午、於勝長寿院、有如法経十種供養、是故鎌田兵衛尉正清息女所修也、且為奉訪左典廩御菩提、且為加亡父追福、一千日之間、於当寺囉淨侶、令行如說法華三昧^(中)、願文信救得業草之、因幡前司広元清書之^(中)、将軍家并御台所為御結縁令參給、導師大学法眼行恵、云経王功能、云施主懇志、所述旨趣、已徧富棲那之弁智、聴衆抑双眼、霑両衫^(原)、上野介憲信・工匠藏人・安房判官代高重等取布施、彼女性父左兵衛尉正清者、故大僕卿功士也、遂一所終其身、仍今将軍家殊令憐愍給之間、雖被尋遺孤無男子、適此女子參上、以尾張国志濃幾・丹波国田名部両庄地頭職令恩補託、

建久五年(一一九四)、勝長寿院如法経十種供養を故鎌田正清の息女

が修したという記事である。かねてより源頼朝は正清の遺児を探索していたが彼の息子はなく、この度その息女が鎌倉に参上したという経緯が述べられる。正清の遺児として史料上確認できるのはこの息女一人であるため、先の系図に記される正清娘は彼女に比定できよう。亡父鎌田正清の供養後、彼女は頼朝から尾張国篠木荘・丹波国田辺荘両所の地頭職を宛がわれている。

ただし、【史料3】だけでは正清遺児の娘の実在が分かっていても、「香貫三条局」と称した人物のそれは未詳のままであろう。しかし、その実在は次の史料から確かめることができる。

【史料4】年末詳「源胤雅言上状」⁽⁵⁰⁾ 抜粋・網掛け箇所筆者以下同

下野次郎雅繼法師息九郎源胤雅謹言上

欲早被停止賀貫三条局養子民部卿法印能親弟子少将律師⁽⁵¹⁾非分領知、任延応御下知并三条局寛喜讓状、蒙御成敗尾張国英比郷内本領乙河村地頭職事、

① 右当郷者、三条局跡也、而於惣領者、去貞応三年之比讓与能親、至当村者、去寛喜二年之比、分讓胤雅祖父下野前司入道雅宝畢、各別知行経年序之処、能親悪行之余、討雅宝師匠僧宗賢於夜討、令殺害其身、搜取資財物等、剩引率二百余人悪党、押寄雅宝宿所致狼藉之間、奪取彼等大刀・刀事顯然也、此上又為刑部僧正弟子致京方畢、云彼云此悪行重疊之間、故前司入道御時、能親代寛賀法橋与雅宝番対問之処、旁罪科依無所遁、構事於左右、号有後判讓、捧嘉禎元年契状、可充給当村之由、載陳状之時、前司入道殿仰云、故賀貫尼遺跡事、有申置旨、令对答能親罪科於嘉禎状可和与之由、被仰下之間、令和与畢、仍被成下延応元年和与御下知之後無異論、自寛喜三年至建長元年令領知事二十ヶ年也、而前司入道殿御隠後、伺御世継目、能親又捧彼契状致濫訴之刻、建長元年遂問注畢、爰彼御下知云、能親旁

罪科令和与之間、被成此状之由雖称之、其趣不分明歟、随又雅仏所進寛喜讓状并嘉禎年貢免除状者先判也、能親所帶嘉禎讓状者後判也、其上能親已嘉祿三年給惣領御下文畢、(後略)

右は年未詳であるも、文中に記載される年号から少なくとも建長元年(一二四九)以降に作成された尾張国英比郷乙河村地頭職に係争対象とする相論文書である。網掛けで示した「賀貫三条局」という人物に興味を惹かれるが、まずは史料で述べられる係争地の相伝関係を確認したい。傍線部①によれば、尾張国英比郷はもともと賀貫三条局の所領であり、貞応三年(一二二四)の相続にあたって同郷惣領は養子の民部卿法印能親に譲与し、また寛喜二年(一二三〇)には同郷内乙河村地頭職を源胤雅の祖父下野前司入道雅宝に譲与している。三条局と雅宝の系譜関係は未詳だが、所領相続の関係から雅宝が三条局の得分親であることは間違いない。

では三条局と親族関係にある【史料4】の人々は何者であろうか。傍線部②をみるに、能親による雅宝師匠宗賢の殺害および雅宝宿所への悪党乱入と強盗といった数々の非法行為が列記されるなかに、能親が承久の乱時に後鳥羽上皇護持僧長嚴の弟子となり京方に、しかも京方主要人物に近い立場で加担していたことが見出せる。尾張地域に関わる源姓で、承久の乱の京方勢力となれば、山田重忠をはじめとする尾張源氏一族が知られる。

この相論は源胤雅の訴えが容れられ、文永二年(一二六五)に同郷地頭職が鎌倉幕府から安堵されている⁽⁵¹⁾。その際、【史料4】の係争地英比郷乙河村を「小河村」と表記しており、両村が同音であることが窺える。となれば、尾張国内に権益を有した源姓である点を勘案するに、先の人々は尾張源氏の系譜に属する小河一族であると考えられる。⁽⁵²⁾『尊卑分脈』の清和源氏満政流には尾張源氏内に小河を拠点とする重房・重

清がみえる。また治承・寿永の内乱では、養和元年(一一八一)に「小河兵衛尉重清」が、美濃国で平家方に討ち取られた頼朝方の源氏として記載される⁽⁵³⁾。三条局が英比郷を伝領した詳細な経緯は未詳であるが、尾張国英比郷小河村を本拠地とする尾張源氏一族と姻戚関係をなした結果伝領されたと推察される。これらの推定が正しければ、「賀貫三条局」は尾張地域に縁のある人物ということになる。この英比郷は知多半島内に立地し、長田忠致の所領野間内海荘の北側にある。ここで【史料3】で鎌田正清娘が拝領した尾張国篠木荘の事例を想起するに、この「賀貫」は「香貫」の誤記の可能性が高まろう。彼女が尾張地域と関わりがあるのは、自身の母が長田忠致の娘であることに拠ると推測される。

【史料4】の三条局の活動終見の時期を讓状が制作された寛喜二年(一二三〇)とし、平治の乱が勃発した平治元年(一一六〇)頃を出生時期とした場合、彼女の存生期間として十分許容される時間幅であろう。すでに長田忠致は治承・寿永の内乱過程で誅殺されており(詳細は後述)、遺領である野間内海荘は正治二年(一一〇〇)に梶原景高室へ配分されている⁽⁵⁴⁾。【史料4】の三条局が鎌田正清の娘にして長田忠致の孫娘に該当するならば、尾張地域へ遺領配分を受けるのは自然な流れであると考えられる。

如上の考証から、本稿では【史料3】の鎌田正清の娘と、【史料4】の「賀(香)貫三条局」を同一人物と判断する。

③ 狩野川流域社会と香貫

(1) 香貫と狩野川流域の諸勢力

次に、鎌田正清娘が冠した「香貫」について考察を進める。

香貫は、伊豆・駿河両国を流れながら駿河湾に注ぐ狩野川水系に属し、その河口部左岸地域内の郷名である。現在では沼津市の上香貫・下香貫一帯に該当し、対岸には本所を平頼盛、預所を牧氏とする大岡荘（牧）がある。こうした立地関係から先行研究では、香貫を大岡荘と地域的繋がり（濃い）の一体的な地域と把握してきた⁽⁵⁵⁾。実際に香貫は駿河湾を臨み、狩野川流域の河川交通および駿河湾の海上交通の要衝にあるだけでなく、同所の上流には狩野川水系最大の支流黄瀬川との合流地点があり、中世では東海道の宿駅黄瀬川宿が置かれる陸上交通の要地でもあった。

香貫の史料上の初見は『平治物語』下「頼朝遠流の事、付けたり盛康夢合わせの事」にある「兵衛佐は当社大宮司季範が娘の腹の子也、この腹に男女三人の子あり、（中略）今一人の男子は駿河国かつらと云所に有けるを、母方のおぢ内匠頭朝忠と云者、搦とりて平家へ奉りしを、名字なくては流さぬならひにて、希義と付られて、土佐国（介世）きらと云所にながされておはしければ、さらの冠者とは申けり」という記事である。義朝の遺児希義が潜伏先として選択したのがこの香貫であり、平治の乱当時に義朝勢力下の地であると認識されていた。さらに希義が「号鎌田冠者」（尊卑分脈）した点を踏まえ、杉橋隆夫は「香貫にも鎌田氏の所領の一部ないしは屋敷などが存在」し、「鎌田氏に養育され、その所領内に成長したとの想像さえ許容する」と指摘している⁽⁵⁶⁾。前章にて【系図A】の「香貫三条局」の実在を勘案するに、香貫を平治の乱段階で鎌田氏勢力圏の拠点と見做すことは十分可能であろう。さらに香貫を含む狩野川下流域は、上流の伊豆半島の所々との関わりが密接で、例えば石橋山合戦で頼朝方が敗走した時、参戦した加藤光員・景廉兄弟が伊豆国府に至り大岡牧で合流を果たしている⁽⁵⁷⁾。狩野川下流域と上流域という地域的関係に加え、下流域が親頼朝勢力の地と認識されていたからこそ、選択されたと考えられる。

そうであるならば、【系図A】にある鎌田正清の尻付「北条四郎時政

ノ烏帽子父」という記載は（あるいは【系図C】で表現される鎌田通清と時政の烏帽子親子関係）、狩野川流域社会での地域的連携という文脈のなかで理解される必要がある。つまり、狩野川における河川交通・流通において上流に位置する北条氏は、駿河湾の港湾地域に属する河口部の有力な地域勢力である香貫の鎌田氏と密接な関わりを有したと判断される。すでに北条氏については、北条時政と牧の方の婚姻関係に象徴されるように、狩野川河口部右岸地域に位置する大岡荘の牧氏との連携が指摘される⁽⁵⁸⁾。さらには時政の長子宗時の烏帽子親を時政小舅の牧宗親に当てる推定すら出されている⁽⁵⁹⁾。

また、考古学分野でも、如上の理解を裏付ける中世瓦が出土している。香貫山（沼津市上香貫）の北嶺部にある天神洞遺跡では、その瓦集積遺構から中世瓦の総数約二三〇〇点の出土が報告されている。瓦の種類をみるに、北条氏が建立した伊豆国願成就院跡出土の三巴文軒丸瓦・下向陰頭文軒平瓦・半截花文軒平瓦と同文・同範のものが確認されており、時期は十二世紀末から十三世紀前半と考えられている⁽⁶⁰⁾。さらに天神洞遺跡出土中世瓦のうち胎土分類でⅢ類とされる陶器質で濃赤く茶褐色のもの、在地産ではなく遠隔地からの搬入が想定され、軒平瓦の接合も願成就院の瓦とは異なる技法を用いているという⁽⁶¹⁾。この胎土表面の色彩的特徴から尾張産瓦の可能性が高く、さらにはその移入契機に尾張国長田氏と鎌田氏との連携が想像されるのだが、この点は未調査のため今後の検討課題である。いずれにせよ、天神洞遺跡における同文・同範の中世瓦の存在から、北条と香貫という場で狩野川流域の交通・流通を介した繋がりがあったことが理解されよう。

【系図A・C】で認識される鎌田通清・正清と北条時政の烏帽子親子関係は、狩野川流域河口部を扼する有力者鎌田氏とその上流部にある北条氏が連携していたことを示す。また北条氏にとっても、狩野川河川交通・流通に関わる上で、同地域の河口部を押さえる鎌田氏が有力者と目

され、大岡荘の牧氏と同様結びつくことが重要視されたと考えられる。
(2) 香貫郷の宗教的世界

香貫山麓の天神洞遺跡出土中世瓦をみるに、当該地に寺院などの宗教施設があったことを想像せしめる。実際、他の地域資料に着目すると、香貫山の西嶺側にいくつかの宗教施設があった。まず香貫山西麓には、



【地図①】「香貫郷周辺関係図」

現在曹洞宗永平寺派の靈山寺がある。かつて同寺は真言宗であり、寛元二年（一二四四）二月二十九日に「香貫郷於尺迦堂北僧坊書了」（「十八道私記奥書」）と釈迦堂で真言密教の行法書写がされ、この釈迦堂を靈山寺前身とする指摘がある。⁽⁶³⁾この靈山寺では律宗の影響が濃厚にみられ、中世墓塔群のなかから青銅製蔵骨器が出土し、西大寺叡尊の弟子成真が元亨三年（一二三三）に没したことが石像五輪塔銘からみえる。成真は「駿州靈山寺成真宗賢房」と記録され、同寺に住していたこと、さらに真言律宗勢力が香貫の地に広がっていたことなど興味深い事実が窺える。⁽⁶⁴⁾

また同所が国衙領であったことも分かっている。元徳元年（一二二九）では「香貫郷事、定□問答相違之間、国方使乱入之由」と、香貫郷での年貢未納に関して国衙側使節の乱入が問題となっている点、また建武五年（一三三八）に駿河守護今川範国から「駿河国香貫郷正税四分壹」が兵糧料所として松井助宗に宛がわれている点から、鎌倉期を通じて香貫の地は基本的に国衙領であったと理解される。⁽⁶⁵⁾

同じく靈山寺の南方にあつて香貫山西麓から突き出した丘陵部に、香貫山経塚の存在が知られる。十二世紀の平安後期頃に造営されたもので、その遺物に銅製経筒や和鏡・渥美産壺・青白磁合子・銅銭などが出土している。遺構状態等から、本経塚は十四世紀以後に一字一石経の追納が認められ、⁽⁶⁶⁾さらに蓮弁文青磁碗片は十三世紀のものが混入している可能性もあるという。⁽⁶⁷⁾造営当初後の鎌倉時代以降も、本経塚が地域で信仰され経営されてきた証左であろう。駿河湾を一望し、かつ富士山を遠望できる同地は、山中・海上他界観を満たす景勝地である。香貫山の南西部には式内社楊原神社（『延喜式』では伊豆国に属す）もあり、さらに同山から北東には伊豆国府・三嶋社が近在する。郷内の聖地として香貫山が認識されていても何ら不思議はない。香貫山および麓一帯に経塚や寺院などの宗教施設が多く存在するのも、同所が聖地と認識されていたことに拠ろう。

こうした地に、平治の乱後、鎌田正清の遺児香貫三条局が住したことはあらためて注目される。【史料4】にみたように、彼女は様々な経緯で遺領を得ても基本的に「香貫」と称して、同地を主たる拠点としていたと判断される。例えば武蔵国高麗氏の事例で、宝治二年（一二四八）二月二十八日「高麗景実讓状」には、「きやふつか」⁽⁶⁸⁾が娘土用弥御前に譲与されており、所領内の経塚経営が女子によって担われていることが分かる。⁽⁶⁹⁾こうした事例に鑑みると、香貫三条局が香貫郷に住した理由は、同所がかつて鎌田一族の所領であったという理由以上に、彼女自身が亡父正清等の追善供養を彼の地で営んでいた、と考えることは穿ち過ぎであろうか。

ともあれ、鎌田一族の所領香貫郷は、地域の大動脈である狩野川水系と海上交通の駿河湾、加えて東海道宿の黄瀬川宿近在という陸上交通の要衝にあるだけでなく、多くの宗教施設が建立され一種の聖地としての性格も具有していたことは了解される。

④ 鎌田氏の本拠と東海地域

（一）鎌田氏本拠と長田忠致の関係

鎌田氏本拠の所在に関して、「鎌田」の地名に引きつけて遠江国鎌田御厨に比定する見解が出されるなど、現状は必ずしも一定していない。⁽⁷⁰⁾しかし、これまで見てきたように鎌田氏に関する【系図A-C】の記載内容は決して荒唐無稽なものではない。【系図A】で鎌田通清を「住駿河」と記すため、やはり鎌田氏の本拠は同国に所在するものと考えられる。そこで駿河国における鎌田氏の本拠を考えていきたい。鎌田氏本拠の最有力候補地は有度郡鎌田郷で、すでに近世末期成立の地誌『駿河志料』でも同地に比定されているが、当然ながら同時代史料を用いて再検証する

地図② 長田荘・鎌田郷関係図



【地図②】「長田荘・鎌田郷関係図」

必要がある。

有度郡鎌田郷は正応五年（一二二二）三月二十六日「中務丞惟秀讓状」にて陸奥国曾我氏の所領に「するかの国かまたのかうししきはんぶん」とあるのが初見である。⁽⁷¹⁾ 南北朝期では「駿河国淺服庄内東郷并瀬奈春吉・鎌田春吉」とあって円覚寺領莊園内の地名として確認できるが、右の史料以前の領有関係は未詳である。この鎌田郷は現在静岡市内を流れて駿河湾に注ぐ一級河川安倍川右岸地域に大字名「鎌田」（現静岡市駿河区鎌田）として残るため、同地に比定できる。ちなみに淺服庄の莊域は主に同川下流左岸地域に相当するので、仮に旧河道における乱流状況を想定したとしても、鎌田郷の立地は鎌倉期淺服庄からやや西側へ外れた対岸地域にあったといえよう。

さらに鎌田郷周辺地域の情報を併せると、同所が鎌田氏の本拠である蓋然性が一層高まる。鎌田郷が立地する安部川下流右岸部には、現静岡市駿河区小坂・広野を含む地域に比定される熊野社領長田荘が近在する。この長田荘は、左に登場する平家方の「長田入道」という人物の本拠地とされている。⁽⁷³⁾

【史料5】『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十月十三日・十四日条

十三日（中略）又甲斐国源氏并北条殿父子赴駿河国、今日暮兮止宿大石駅云々、戌剋駿河目代以長田入道之計廻富士野襲来之由有其之告、仍相逢途中、可遂合戦之旨群議、

（後略）

十四日、癸巳、午剋武田・安田人々經神野并春田路、到鉢田辺、駿河目代率多勢、赴甲州之処、不意相逢于此所、（中略）遂長田入道子息二人梟首、遠茂為囚人、從軍天寿、被疵者不知其員、列後之輩不能発矢、悉以逃亡、酉剋梟彼頸於富士野傍伊堤之辺云々、

【史料5】は平家方の駿河目代橘遠茂が「長田入道」の差配で甲斐源氏への攻撃を企てたという内容である。甲斐源氏による「大石宿」（潤井川上流、現富士宮市北側）への軍事情報を把握し、かつ駿河目代の軍勢に属している点から同氏が同国に住したと考えられる。甲斐源氏との鉢田合戦で平家方は敗北し、長田入道と息子はともに梟首される。

この長田入道とその子息について、高橋昌明は平治の乱で源義朝・鎌田正清を謀殺した野間内海荘の長田忠致父子に当て、⁽⁷⁴⁾ 元木泰雄は「鎌田の本領が駿河であったことを考えれば、鎌田討伐後に所領を奪取したとも考えることができる」としつつ、長田忠致に当てるか否かについては慎重な姿勢をみせている。⁽⁷⁵⁾ 果たして駿河国を本拠とする長田入道は、先の長田忠致その人なのであろうか。

平治の乱後、長田忠致・景致父子の動向は諸史料で齟齬がみられる。『平治物語』では、治承・寿永の内乱中に長田父子は源頼朝に降伏して平家追討の戦列に加わるも、戦後は「青墓の―筆者註）義朝の墓の前に板を敷て、左右の足を大釘にて板に打付、足手の爪をはなち、頬の皮をはぎ、四五日のほどに、なぶり殺しにぞころされける」との仕打ちを受ける。他にも「建久元年十月、頼朝既上洛ス、爰ニ、長田庄司平忠致、此間ハ鎌倉ニ置レタリケルヲ、美濃国青墓ノ宿ニテ切レケリ」（『保暦間記』）とあり青墓で長田父子が梟首された点で共通する。一方の『吾妻鏡』は長田父子への意趣返しについては触れていない。『平治物語』下巻部分は増補箇所が多分に認められることから、⁽⁷⁷⁾ 元木が指摘するように、長田父子の梟首は創作の可能性が高く、即座に事実と受け止めることはできない。⁽⁷⁸⁾

長田忠致の本拠地について、地域伝承に依拠した諸論考では野間内海荘のある知多半島内に比定する向きもあるが、そもそも「尾張国野間の内海、長田庄司忠致が宿所へ着かせたまひ候ひぬ」（『平治物語』）とあるように、同所は「宿所」であって忠致の館や本宅という記載ではない。

となれば、長田忠致の本拠地を野間内海荘とする根拠はなからう。そこで興味深いのは先の駿河国有度郡長田荘の相伝関係史料である。室町期頃の作成とされる年未詳「長田庄知行次第写」では「保延六年二長（田脱）庄美福門院ヨリ御寄進也」とあり、保延六年（一一四〇）に美福門院から熊野那智山に寄進される。この長田荘について、同じく室町期頃作成の年未詳「駿河国長田荘本家・領家等相伝系図」に預所として「長田庄司」が登場する。⁽⁸⁰⁾長田庄司が美福門院の下で預所に任じられていた点是不審とする指摘もあるが、⁽⁸¹⁾『愚管抄』には長田忠致を「郎等鎌田次郎正清ガ舅ニテ内海庄司平忠致」としており、必ずしも「庄司」を長田荘に引きつけて理解する必要はなく、むしろ尾張国野間内海荘との関連が窺える。というのも、同荘は康治二年（一一四三）に鳥羽院御願寺安楽寿院領として立荘されているため、⁽⁸²⁾先に鎌田氏の事例でみた、「庄司」が院領形成への功績により獲得した地位と推測されることを踏まえるに、長田忠致も野間内海荘の形成に携わったが故に、「庄司」の地位を得たのであろう。⁽⁸³⁾あくまでも忠致は、本貫地の駿河国長田荘で預所という立場にありながら、野間内海荘など遠隔地荘園の形成に関わっていたと考えられる。となれば、美福門院が熊野神社へ長田荘を寄進した時期に「長田庄司」を名乗った人物は、やはり『平治物語』の「長田庄司忠致」以外に考えられないのではないか。『平治物語』の「長田庄司忠致」を『吾妻鏡』の「長田入道」と同一人物と見做し、長田忠致は本拠を有度郡長田荘としつつ、地域拠点として知多半島の野間内海荘を有していた。そのように仮定すると、実は鎌田氏との関わりも明瞭になる。

まず、第一章でみた鎌田正清の父通清が「鎌田庄司正致」（『保元物語』）と名乗り、「正致」に改名していた点である。通清の時期に、同氏は駿河国を拠点化し院権力へ奉仕することで「鎌田権守」と称している。長田忠致の一族が「致」を通字としていた点を勘案すると、通清が有度郡鎌田郷を拠点化した際に、すでに近隣の有度郡長田荘預所の地位

にあつて地域有力者であつた忠致一族と連携した結果、通清の「正致」という改名が行われたと推測される。かつて義朝が東国に下向し、彼と連携した相模武士たちが次々と公領の郷へと進出した点を踏まえるに、⁽⁸⁴⁾鎌田通清による公領鎌田郷の拠点化や、鳥羽院へ結びついた義朝のバックアップと院近臣の国守の支援も想像されよう。さらに、如上の推測が許されるならば、鎌田郷・長田荘という地域的な交流の延長線上に、鎌田正清と長田忠致娘の婚姻成立を見通すこともできる。通清段階で鎌田郷を拠点化した鎌田氏は、後発の外來勢力であつた。それゆえすでに当該地域を本拠地化し、預所の地位にある在來勢力の長田氏と結びつくことは、地域参入に当たつて重要な連携であつたと考えられよう。

加えて鎌田郷・長田荘には東海道宿の手越宿が近在し、地域交通・流通との関わりが窺える。冒頭で確認した、源義朝が東山・東海道宿々や近在する地域勢力との間に、姻戚関係や郎等編成を遂げていたことを踏まえるに、東海道宿であり甲斐方面の南北交通の要衝にある手越宿と関係を有していたことは十分想定できよう。事実、甲斐源氏の源清光は手越宿遊女との間に武田信義と逸見光長をもうけており（『尊卑分脈』）、その重要性が窺える。手越宿と義朝との直接的な関係は未詳ではあるが、郎等鎌田通清を配することで、かかる宿との連携を企図していたのかもしれない。⁽⁸⁵⁾

そもそもなぜ鎌田正清と長田忠致は舅・婿という姻戚関係を結ぶに至ったのか、という点を考えるならば、地域社会のなかで両者の本拠地が近接し、日常的な交流が生まれていたとみるべきだろう。本稿は『吾妻鏡』の「長田入道」を長田忠致とし、同氏の本拠地を駿河国有度郡長田荘に、鎌田氏の本拠地を同郡鎌田郷に比定する。

(2) 在來領主長田氏と東海地域

右の考察を受け、鎌田通清・正清父子が姻戚関係を結んだ長田一族の

地域的ネットワークの広範さに驚かされよう。これまで『平治物語』以外で彼ら一族の動向はほとんど知られていなかったが、関連史料から長田一族の活動を追ってみた。

『尊卑分脈』では忠致の兄弟親致は右衛門尉に任官しており在京したことがみえる。一方の忠致は源義朝誅戮の功績で壱岐守への任官が記されるが(『平治物語』『尊卑分脈』)、壱岐守任官の事実は他から確認できない。親致は在京活動が主であり、忠致は在地での活動が主であったと考えられる。

治承・寿永の内乱期では先の【史料5】にて、甲斐源氏が駿河国へ軍事行動をした際に、平家方は長田忠致の指図で富士野を経由して源氏方を襲撃する構えであった。この襲撃は甲斐源氏らが「大石宿」(潤井川上流(富士宮市北側))まで進軍したという軍事情報を把握した上での行動であろう。甲斐方面からの軍事侵攻に対し、長田氏の差配で対応したことは、同氏が駿河・甲斐方面の交通に知悉していなければ不可能であり、同氏が当該地域の交通と情報に通じていたことを窺わせる。さらに長田氏は、伊豆方面にも情報網を張り巡らせていた。

【史料6】『吾妻鏡』治承四年(一一八〇)八月九日条

(前略) 今日大庭三郎景親招秀義談云、景親在京之時、対面上総介忠清(兼親)之間、忠清披一封書状、令読聴于景親、是長田入道状也、其詞云、北条四郎・比企掃部允等為前武衛於大將軍、欲顛叛逆之志者、読終忠清云、斯事絶常篇、高倉宮御事之後、諸国源氏安否可紀行之由、沙汰最中此状到着、定有子細歟、早可覽相国禪閣之状也(云々)、景親答云、北条者已為彼縁者之間、不知其意、掃部允者早世者也者、景親聞之以降、意潜周章、与貴客有年来芳約之故也、(後略)

右は長田入道が頼朝拳兵準備の情報を平家の郎等藤原忠清に伝達した

内容である。忠清から事情を尋ねられた大庭景親が応答するなかで、長田方の情報に錯誤がみられるものの、伊豆方面の事情に通じていることは重要である。そもそも伊豆・駿河・甲斐では道路交通や人々の交流も密接で、例えば西岡芳文の指摘によると、平安末期に伊豆走湯山修験の行者が富士山麓へ集住するようになり、富士信仰が駿河・甲斐両国に広がっていたという⁽⁸⁶⁾。駿河国を本拠とする長田氏がかかる既存の地域ネットワークを通じて伊豆方面の情報を得ていても不思議ではない。さらに、長田忠致の婿鎌田正清の拠点が狩野川下流域の香貫郷にあった点、長田忠致娘との間の遺児と思しき香貫三条局が香貫郷に居住した点をあわせるに、長田氏が香貫郷に何らかの権益を有していたことも想定される。狩野川を介して上流の伊豆国北条の情報が入ってきたことも想像される。

有度郡長田荘の立地は、駿河湾に注ぐ一級河川安倍川の河口を扼するもので、中世東海道宿駅の藤枝・岡部・宇津ノ谷・丸子・手越・駿府という交通路上にあり、宇津ノ谷から手越に至る中山間部の要路を臨む⁽⁸⁷⁾。つまり同荘は海上・陸上交通の両方を押さえた立地環境にある。【史料5】【史料6】でみた長田氏の駿河・伊豆方面等に張り巡らされた情報網の存在より、宿駅への関与を通じ情報を得ていたのである。そうした地域交通・情報に長けた長田氏の存在形態は、彼ら一族が当該地域の在来領主であり、かつ地域有力者と目されていたからに拠ろう。加えて【史料1】にあるように知多半島の尾張国野間内海荘も拠点としたように、東海地域の陸上・海上交通に深く関わり、その拠点を東海地域へ広く展開していたと考えられる。その有様はまさに、宿などの地域交通拠点を掌握し富を蓄積していく「長者」の姿に重なる。

一方の鎌田氏の動向を振り返るに、駿河国との関わりは通清段階から始まる後発勢力であった。ゆえに通清が「正致」(『保元物語』)と改称したごとく、在来勢力長田氏と地域的に関わるなかで、手越宿に近接し

ながら、長田氏が関与する既存の流通体系に入り込み、結果として鎌田正清と長田忠致娘との間に婚姻関係が成立するに至る。鎌田一族の駿河での活動および地域基盤の形成は、東海道沿線の宿を臨み、かつ安倍川河口部を扼する在来勢力長田一族のバックアップなしには成り立たなかつたと考えられる。また、鎌田一族はそもそも京武者としての存在形態を有しており、活動の主たる場は京である。地域基盤である駿河国鎌田郷との関わりは、在来勢力で長者の性格を持つ長田氏に大きく依存した形で拠点化が成されたのであろう。

こうした鎌田氏の関与の度合いは鎌田郷の立地環境からも垣間見える。確かに、鎌田郷は東海道宿駅の手越宿に近在するものの、長田氏が関与する東海道の主要ルート上からは外れており、安倍川右岸の駿河湾河口部にほど近い微高地上に立地するが、その下流にある駿河湾の河口は長田荘の荘域に属す。必然的に、河川交通における要路は長田荘に帰属することになる。長田氏の本拠と鎌田氏の本拠を比較するに、在来・外来領主における流通機構への関与の度合いが立地景観からも窺えるのである⁽⁸⁸⁾。こうした本拠景観の有様が、在来勢力（＝長者）の実力に依存して形成された、京武者たちが地域で築いた拠点形成の実態であった。

義朝の地域基盤とその限界―おわりにかえて―

武家の棟梁源義朝の「一ノ郎等」であった鎌田正清について、これまで彼の動向は主として『保元物語』『平治物語』で知られるばかりで、その実像は物語の帷に包まれたままだった。本稿ではこれまで鎌田通清（正致）・正清・香貫三条局の三名を取り上げ、平安末期から鎌倉前期頃の鎌田一族の動向を子細にみてきた。明らかとした要点は大略以下の通りである。

鎌田氏は京武者としての存在形態を有しつつ、鳥羽院権力と結んだ源

義朝のバックアップおよび院近臣勢力の国守の影響下で駿河国鎌田郷を本拠とし、次第に狩野川下流域の香貫郷にも拠点をもち、如上の地域基盤をベースにさらには伊豆国北条氏とも交流を持つようになっていく。だが、かかる鎌田氏の地域活動には、駿河国長田荘を本拠とする在来領主長田氏との連携が必要不可欠であった。長田氏は安部川河口部にあって中世東海道の主要宿駅をその勢力圏から臨みながら、西方面には知多半島の尾張国野間内海荘に拠点を、また北・東方面には駿河国内だけでなく、甲斐・伊豆地域にも情報網を巡らせていたことが窺える。すでに冒頭で述べたように、源義朝は、京―東国を繋ぐ東山道・東海道地域の要衝である青墓宿・橋本宿・池田宿の遊女と結ぶことで、これら交通拠点への関わりを有した。加えて、本稿で明らかにしたように、義朝は交通拠点を繋ぐ重要な脈管として、東海道沿線に自身の乳母子でかつ股肱の臣鎌田正清を配したのである。東海道宿の長者的存在である長田氏と郎等の鎌田氏が姻戚関係を結ぶことで、義朝は鎌田氏を通じた東海道交通への一層のコミットを企図したと考えられよう。

(1) 義朝権力と東海地域の基盤

最後に、これまでの鎌田正清を事例とした本稿の考察を踏まえ、源義朝が築いた地域基盤の東海地域における形成過程とその特質について検討したい。義朝と東国・東海地域（一部青墓宿など東山道地域も存在する）との関わりについては、彼は遅くとも永治元年（一一四一）までに無官のまま廢嫡されて東国に下向し、久安三年（一一四七）に嫡男頼朝が鳥羽院の寵妃待賢門院璋子の近臣で熱田大宮司家藤原季範の娘との間で生まれる以前には帰京し、以後は在京活動が知られる⁽⁸⁹⁾。義朝とこれら地域との直接的な関わりはわずか数年ではあるものの、彼が京―東国間の地域交通と勢力扶植を重視したからこそ、先述したごとく、その大動脈である東山道・東海地域交通の要衝の青墓宿や橋本宿・池田宿といっ

た遊女と結び、それらの脈管として郎等鎌田正清を配したと評価できる。このことは義朝が一時的に本拠を置いた「鎌倉之楯」(鎌倉龜谷)を圍繞するように、北西の山内荘に郎等山内首藤氏を、鎌倉から江戸湾へ抜ける要衝六浦に義朝の長子義平らが大中臣氏を配したことと同様の意味を持ったであろうが、京―東国を結ぶ意味ではやはり「義朝ガ一ノ郎等」の鎌田正清が担った役割の重要性は高い。

源義朝が最後に頼ることとなった長田忠致について、長田氏の本拠駿河国長田荘が少なくとも保延六年(一一四〇)以前には美福門院領であったこと⁽⁹¹⁾、また同氏の知多半島における拠点尾張国野間内海荘が康治二年(一一四三)に鳥羽院御願寺安楽寿院領として立荘されていること⁽⁹²⁾、義朝との接近を考慮する上で大きな意味を持つ。なぜなら、長田氏は鳥羽院・美福門院に連なる地域勢力だったと思われるからである。従来よく説明されるように、河内源氏嫡流を廃され無位無官であった義朝が政治的上昇を果たした最大の要因は鳥羽院・美福門院への接近である。鳥羽院近臣関係者である熱田大宮司藤原季範との姻戚関係や、仁平三年(一一五三)三月の下野守への任官(『兵範記』)が知られる。一方、尾張国では美福門院の父長実・兄顕盛や伊勢平氏など鳥羽院の近臣が尾張守となるなかで、鳥羽院・美福門院に関する荘園が急増し、尾張国の地域勢力が院権力へと結びつく動向が指摘されている⁽⁹³⁾。また義朝の子息円成(近衛天皇宮藤原呈子の雑仕女常磐との間の子)と愛智郡司慶範(「範」を通字とする熱田大宮司一族関係者か)の娘との間に婚姻が成立している(『尊卑分脈』)。尾張・駿河地域(さらには甲斐・伊豆方面にも)に所領展開と影響力を及ぼした長田氏と源義朝との連携は、鳥羽院・美福門院に連なる勢力という関係の上で成り立っていたと考えられる。熱田大宮司藤原季範を舅とする義朝が愛智郡司慶範との姻戚関係や郎等鎌田正清と長田忠致との婚姻関係を梃子に、尾張国内の愛智郡・智多郡にまで勢力を及ぼそうとしていたことが推測される⁽⁹⁴⁾。

そもそも義朝の東国における軍事行動と勢力拡大は、彼と連携あるいは姻戚関係を築いた東国武士勢力の上総氏の菅生荘、三浦氏の三崎荘、中村氏の早河荘、波多野氏の波多野荘をみるに、いずれも摂関家領を基盤とし、摂関家の家産機構に属する義朝の父為義の動向と同じく、義朝の東国における活動の基盤は当初は摂関家領荘園と現地の武士勢力であったことが明らかにされている⁽⁹⁵⁾。かかる関係を前提としながら、義朝は父為義以来の縁故や地域の武士勢力と新たな主従関係を結びながら、かつ自己の乳母子や郎等を鎌倉周辺の交通の要衝に配置し軍事拠点化を進めてきた。これらの関係は、僅かな期間でありながら、実際に義朝が上総国内で上総常澄の庇護下で育ち、「義朝ハ、坂東ソダチノモノニテ」(『保元物語』)と記されるように、実際に義朝が東国に住して活動した意義は大きい⁽⁹⁶⁾。そうした地域に対して、実際に義朝が居住し現地勢力と直接的に主従関係を構築できなかった京―東国を結ぶ東海地域に、鎌田氏が本拠を形成し長田氏と地域的に連携しながら京と東国に跨がる義朝の軍事行動の一端を支えていたことになろう。ここに、「義朝ガ一ノ郎等」鎌田正清が駿河国に本拠を置いた意義があり、義朝が影響を及ぼす京・東国の二拠点を繋ぐ役割を果たしていたことになる。ただし実際には、後発で外来勢力であった鎌田氏は、義朝の「御当重代の奉公人」(『平治物語』)であり、在来勢力の長田忠致と姻戚関係を結び、同氏の東海道ネットワークに依拠することで拠点を形成するに至ったと理解される。

(2) 義朝権力の限界と鎌倉幕府の成立へ

だが、右のごとく義朝が東海地域に形成した地域交通拠点のハブや諸勢力との連携を通じたネットワークは決して強固なものではなかった。それは、義朝一行が東国への逃避行に際し逗留した野間内海荘にて、長田父子に謀殺されたことから明らかである。また、嫡男頼朝を生んだ

熱田大宮司一族も、義朝と義兄弟の関係にある大宮司藤原範忠は『平治物語』で「今一人の男子は駿河国かつらと云所に有けるを、母方のおぢ内匠頭朝忠と云者、搦とりて平家へ奉りしを」と義朝の遺児希義を捕らえて平家に差し出している。この藤原範忠の動向は、熱田大宮司一族のネットワークが尾張から駿河にまで及ぶ可能性を示唆するものである。熱田大宮司は義朝と姻戚関係を有しつつも、しかし範忠が平治の乱で信西派として反藤原信頼の立場をとっていた点を踏まえるに、義朝とは利害が一致していないのである。

地域諸勢力に依存して結ばれた関係は、彼らとの利害関係の不一致により容易に瓦解する可能性を常に孕み、こうした勢力が基盤とする宿などの流通拠点も決して一枚岩ではなく多様な勢力が重層的に重なりあい複雑な利害関係を形作っていたのである。その様相は、例えば義朝一行が立ち寄った美濃国青墓宿で如実に表れている。義朝はすでに青墓宿の長者内記大夫行遠の娘大炊との間に娘を成すなど深い人的関係を持つ。しかし、東国下向にあたって止宿した際には、匿おうとする内記一族とは異なり、青墓宿の宿人等（「在地の者共」「宿の人」など（『平治物語』））が一行を襲う。普段であれば、長者一族と宿に集散する人々（「宿人」）の関係が成り立っているようだが、一枚岩というわけではなかったのである。源義朝段階において、外部から宿駅などの交通拠点にコミットする権力は、諸勢力の一部ないしは皮相的関与にとどまらざるを得ず、常に宿と地域社会の利害関係に左右されていたといえよう。鎌田正清を通じた東海地域交通へのコミットとその結末が、右の想定を端的に示している。

冒頭で触れたように、保元の乱における義朝の武力編成の実態については多くの検討課題を残す。ただし、義朝による東山道・東海道諸国の武士勢力動員の実効性の規模や性格の如何に関わらず、『保元物語』の義朝方勢力をみるに、義朝を養育した上総常澄の子広常や、康治二年

（一一四三）に義朝が下総国相馬御厨における千葉氏と下総守藤原親通の紛争に介入して「庄状之文」を責取った千葉常重の子常胤、さらに大庭御厨乱行事件を契機に連携した相模国大庭景義・景親兄弟などがみえ、義朝が関係を築いた地域勢力の顔ぶれが見出せる。義朝は父為義が依拠していた摂関家の家産機構を通じたネットワーク、その後鳥羽院・美福門院という院権力へ接近することによって新たに構築したネットワークを利用しながら、地域勢力と連携し東海地域の交通拠点に関わっていた。在京する義朝とこうした地域基盤を繋げたのが、鎌倉に義朝帰京後に居住した長子義平だけでなく、脈管として機能した鎌田正清をはじめ、山内首藤氏ら重代の郎等たちによる地域拠点形成であったと考えられる。これが義朝期に見られた在来勢力たる長者の実力に依拠した地域基盤形成の実態と評価できよう。

ところが、これら郎等を配した拠点は院権力に従属する義朝の後ろ盾があつてこそ脈管として機能しうるが、平治の乱による義朝と鎌田正清の敗死によって、存立の危機を迎える。例えば河内源氏重代の郎等で乳母子である山内首藤経俊が、平治の乱後に平清盛の郎等となり「東国ノ御後見」（『源平盛衰記』巻十二）であつた大庭景親に従い、義朝の遺児頼朝の拳兵に従わず敵対した事例は、彼の本拠地山内荘が鎌倉党大庭一族に圍繞される立地環境にあるため、自然と大庭方に従わざるを得ない事情があつた。義朝が広範囲に形成した地域基盤の実態は、院権力との関わりを梃子に地域勢力の実力に依拠して作られたものであり、個々の基盤は脆弱ならざるを得なかつたのである。

一方で、鎌倉幕府の成立と東海地域での諸交通政策はかかる義朝の動向と一線を画す。先学の成果によると、鎌倉幕府は、鎌倉街道上道の事例など東国社会での宿駅建設を進めながら、流通体系に関わる地域諸勢力の再編を積極的に推し進め、「駅路の法」により、これら武士により再編された交通路網への法整備も実施する。こうした交通施策は、在来

勢力である長者の実力に依拠していた義朝期のものとはやはり大きく異なる。それは京―鎌倉間を繋ぐ東海地域でより顕著にみられ、例えば長田荘付近の駿河国宇津谷郷今宿を領有していた在来領主の岡部権守泰綱が頼朝期に排除されていることから明らかである⁽¹⁰⁾。さらに、頼朝による上洛途上での東海地域に対する政治的演出や、丸子宿駅といった宿の新設と既存勢力の排除の事例もいくつも見受けられる⁽¹¹⁾。義朝期にみられた在来勢力（＝長者）の実力に依拠した領主間ネットワークは、右の鎌倉幕府による施策のなかで再編され組み込まれていったこととなる⁽¹²⁾。

それでは山内首藤氏や波多野氏のように、鎌田一族以外の鎌倉期まで生き延びた京武者たちはどのように既存の地域流通体系に関わり、また鎌倉幕府による再編のなかで、地域社会において新たな秩序を形成するにいたるのだろうか。ここに、地域社会にとって後発かつ外来勢力たる京武者たちが、いかにして既存の地域秩序のなかに順応化ないし吸収されていきながら本拠形成を果たしていくのか、という重要課題が立ち現れてこよう⁽¹³⁾。次なる課題として掲げ、後考に譲りたい。

註

- (1) 元木泰雄「保元の乱における河内源氏」〔大手前女子大学論集〕二二二、一九八八年、同「武士の成立」〔吉川弘文館、一九九四年〕、「源義朝論」〔古代文化〕五四一六、二〇〇二年、同「保元・平治の乱を読みなおす」〔日本放送出版会、二〇〇四年〕、同「河内源氏」〔中公新書、二〇一一年〕など。
- (2) 野口実「相模国の武士団―とくに波多野氏と山内首藤氏について―」〔同〕坂東武士団の成立と発展〕戎光祥出版、二〇一三年（初出一九八〇年）、同「院・平氏両政権下における相模国―源氏政権成立の諸前提―」〔同〕二〇一三年（初出一九七九年）、同「武家の棟梁の条件」〔中公新書、一九九四年〕、同「源氏と坂東武士」〔吉川弘文館、二〇〇七年〕など。
- (3) 元木前掲註（1）書「保元・平治の乱を読み直す」九六頁。
- (4) 野口前掲註（2）諸論文。
- (5) 軍事貴族と遊女の関わりについては、主に彦由一太「十二世紀末葉武家棟梁による河海港津樞要地掌握と動乱期の軍事行動―商業貿易業者及アウトロー集団と「遊女」所生貴胤の歴史変革期に於ける政治経済的機能―」〔政治経済史学〕九七、一九七四年、服藤早苗「古代・中世の買売春―遊行女婦から傾城へ―」〔明石書店、二〇一二年〕を参照。
- (6) 岡陽一郎「海と河内源氏」〔古代文化〕五四一六、二〇〇二年。
- (7) 主な研究として五味文彦「大庭御厨と「義朝乱行」の背景」〔同〕院政期社会の研究〕山川出版社、一九八四年（初出一九七八年）、石井進「鎌倉武士の実像」〔平凡社、一九八七年〕、中澤克昭「大庭御厨にみる十二世紀の開発と武士」〔浅野晴樹・齋藤慎一編「中世東国の世界―南関東―高志書院、二〇〇四年〕など。
- (8) 鎌倉佐保「十二世紀の相模武士団と源義朝」〔入間田宣夫編「兵たちの登場」高志書院、二〇一〇年〕。
- (9) 川合康「保元・平治の乱と相模武士」〔関幸彦編「相模武士団」吉川弘文館、二〇一七年〕。
- (10) 元木前掲註（1）論文「保元の乱における河内源氏」一一六頁。
- (11) 川合前掲註（9）論文。
- (12) 主に彦由前掲註（5）論文、服藤前掲註（5）書。
- (13) 『平治物語』中「金丸丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」。『平治物語』諸本のうち、例えば陽明文庫蔵本では大炊の娘延寿を義朝の愛妾に当て、二人の間に生まれた娘を夜叉御前とするが、『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）十月二十八日条の頼朝が美濃国青墓に立ち寄った際、「於青波賀賀被召出長者大炊息

女等、有纏頭、故左典厩都鄙上下向之毎度、令止宿此所給之間、大炊者為御寵物也」とあり、大炊を義朝の愛妾に当てているため、本稿では陽明文庫蔵本の記載は採用しない。本稿での『平治物語』(上・中・下巻)の引用に際しては、特に断らない限り古態本の学習院大学図書館九条家旧蔵本を底本(第一類本の陽明文庫蔵本の上巻と学習院大学図書館九条家旧蔵本の中・下巻を併せたもの)とする。『新日本古典文学大系 保元物語・平治物語・承久記』(岩波書店、一九九二年)を用いる。『平治物語』の諸本比較や増補・改変については日下力『平治物語解説』(同書)および同『平治物語の成立と展開』(汲古書院、一九九七年)を参照した。

(14) 高橋秀樹「三浦介の成立と伝説化」(同『三浦一族の研究』吉川弘文館、二〇一六年(初出二〇〇三年))が指摘するように、義平の母を三浦義明の娘とする史料はいずれも『尊卑分脈』よりもやや信頼の劣る『清和源氏系図』(『統群書類従』第五輯上)や、古態本の陽明文庫本『平治物語』より後の金刀比羅本『平治物語』に見える記載であるため、本稿では『尊卑分脈』の記載を重視し、義平を義朝と遊女との間に生まれた庶長子と捉える(ただし『尊卑分脈』では、義平母をあるいは朝長と同母としており、波多野氏出身の可能性も残る)。

(15) 『保元物語』上「官軍勢汰への事、並びに主上三三殿に行幸の事」。特に断らない限り『保元物語』の記事引用は『新編日本古典文学全集四一 将門記・陸奥語記・保元物語・平治物語』(小学館、二〇〇二年)より行う。

(16) 鎌田正清は諸本類で「政清」とも記載されるが、本稿では煩雑を避けるため、より一般的に知られている「正清」で表記を統一した。また正清は平治元年(一一六〇)十二月九日の臨時除目にて「政治家」と改名し兵衛尉となっている(『平治物語』上「信西出家の由来、付けたり除目の事」)。

(17) 『大日本古文书 山内首藤家文書』五六八号。本系図には嫡流系統の人物等に関して室町期以降の加筆が認められる。

(18) 杉橋隆夫「荘園制の確立と武士社会の到来」(『沼津市史通史編原始・古代・中世』沼津市、二〇〇四年)。

(19) 杉橋隆夫「北条時政の出身―北条時定・源頼朝との確執―」(『立命館文学』五〇〇、一九八八年)、同「牧の方の出身と政治的位置」(上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年)。

(20) 最近では鎌田氏の本拠地を遠江国鎌田御厨とする指摘がある(野口実『源氏の血脈―武家の棟梁への道―』講談社、二〇二二年)。

(21) 京武者の性質については主に元木泰雄前掲註(1)書『武士の成立』に詳しく、主に①在京を原則としながら、京中や畿内近国に狭隘な所領を軍事的・経済的な基盤とし、②院や摂関家・大寺院などの諸権門に種々奉仕しつつ、③官職を得て政治的な上昇を図る存在として把握される。最大の存在としては武家の棟梁と

なる伊勢平氏や河内源氏が想定されるが、京武者の多くは並立した状態で、弱小な京武者は権門家産機構に吸収されていくという。ただし、京武者の概念については、一部の軍事貴族に適應されるのではなく河内源氏郎等である鎌田正清を一員として評価したり(野口前掲註(20)書)、伊豆国北条氏も範疇に含め(野口実『京武者』の東国進出とその本拠について―大井・品川氏と北条氏を中心―)同『東国武士と京都』同成社、二〇一五年(初出二〇〇六年)、さらには平泉藤原氏や越後国城氏などを「京武者系」に準じる地域権力(河内源氏庶流を「京武者系」とする)と捉える向きもある(同『豪族の武士団の成立』元木泰雄編『日本の時代史七 院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年)。武士の多様な実態が解明されるなかで改めて「京武者」概念の再考が求められることは言を俟たない。筆者は、川合康が指摘するように、いわば京武者社会のごとき、京中に活動の主軸を置く武士勢力が互いに共生と競合を繰り返す状態が形成されたのが平安末期の京都社会であると考えている(同『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、二〇一九年)。多くの在京勢力が生成されるなかで、自ずと京武者の裾野も広がっていったと想像され、本稿で考察する河内源氏郎等の鎌田通清・正清を京武者の一員として把握することは問題ないと考える。

(22) 野口前掲註(2)論文「相模国の武士団」。とくに断らない限り、以下山内首藤氏および鎌田氏に関する氏の指摘はすべて同論文に拠る。

(23) 『新潮日本古典集成 方丈記 発心集』(新潮社、二〇一六年)。なお「みのわ入道」について、野口氏は首藤資通に人名比定しているが(前掲註(2)書『源氏と坂東武士』、『尊卑分脈』の記載や後述の資道の動向を勘案するに、首藤資清の兄弟「襄相通弘」が該当すると思われる)。

(24) 『群書類従』第十二輯・合戦部。

(25) 『吾妻鏡』治承四年(一一八〇)十二月二十九日条。とくに断らない限り『吾妻鏡』の出典は吉川本を底本とした高橋秀樹編『新訂吾妻鏡』一―五(和泉書院、二〇一五―二〇二二年(刊行中))に拠る。河内源氏の乳母については米谷豊之祐「武士団の成長と乳母」(『大阪城南女子短期大学研究紀要』七、一九七二年)、田端泰子「乳母の力」(吉川弘文館、二〇〇五年)を参照。

(26) 『魚魯愚鈔』巻第四(『史料拾遺』第八卷、臨川書店、一九七七年)。

(27) 『中右記』長秋記 大治五年(一一三〇)十一月二十二日条。

(28) 『中右記』長承二年(一一三三)二月九日条。

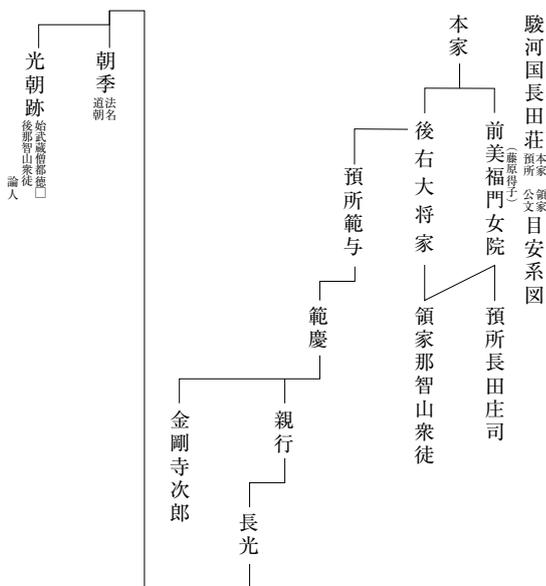
(29) 『本朝世紀』康治二年(一一四三)四月二十日条。野口も指摘するように(野口前掲註(2)「相模国の武士団」、当該期、河内源氏棟梁の源為義の極官が検非違使・左衛門大尉であることに鑑みると、首藤親清の官職は極めて高く、鳥羽院への奉仕により得たものと考えられる)。

(30) 野口前掲註(2)論文「相模国の武士団」。

- (31) 『除目大成抄』第一(『新訂増補史籍集覧』別巻一、臨川書店、一九七三年)、元永二年正月二十二日付。
- (32) 『保元物語』「白河殿攻め落す事」。
- (33) 野口実『列島を翔ける平安武士』(吉川弘文館、二〇一七年)八一頁。また平安期の国衙在庁職の理解については、渡辺滋『揚名国司論』(『史学雑誌』二二三、二〇一四年)、同『平安中期における地域有力者の存在形態―河内国における源訪を事例として―』(『上智史學』五九、二〇一四年)を参照した。
- (34) 五味文彦『吾妻鏡』の筆法(同『増補 吾妻鏡の方法』吉川弘文館、二〇〇〇年)。
- (35) 鎌倉佐保「一二世紀における武蔵武士の所領形成と荘園」(『歴史評論』七二七、二〇一〇年)。
- (36) 野口前掲註(2)論文「相模国の武士団」。
- (37) 元木前掲註(1)書『保元・平治の乱を読みなおす』。
- (38) 院司藤原雅教については、石塚栄「後白河院政期についての若干の考察―主として院庁文書からみた院司の存在―」(『法政史学』二六、一九七四年)や五味文彦「院政期知行国の変遷と分布」(同『院政期社会の研究』山川出版社、一九八四年(初出一九八三年))などを参照。
- (39) 杉橋前掲註(18)論文。
- (40) 『保元物語』中「白河殿攻め落す事」。
- (41) 『保元物語』上「官軍勢汰への事、並びに至上三条殿に行幸の事」。
- (42) 『平治物語』上「信西出家の由来、付けたり除目の事」。
- (43) 義朝軍の特徴として、保元の乱は「基本的に京周辺で活動していた東国武士」が動員されたという指摘(川合前掲註(9)論文二九頁)や、平治の乱は秘密裡の挙兵のため、京中のわずかな郎等しか動員できなかったという指摘もある(平前掲註(1)書『保元・平治の乱を読みなおす』)。両合戦における義朝の武力編成の実態については検討課題を残すものの、鎌田正清に関しては、義朝郎等のなかでも京中を主たる活動基盤とする武士であろう。
- (44) 『愚管抄』(『新訂増補国史大系 古今著聞集・愚管抄』吉川弘文館、一九六四年、以下同)でも「鎌田次郎正清が舅ニテ内海庄司平忠致トテ、大矢ノ左衛門ムネツネ(致経)ガ末孫ト云者ノ有ケル」と長田忠致を鎌田正清の舅と記す。
- (45) 高橋昌明『増補改訂 清盛以前』(平凡社、二〇一一年)。
- (46) 『平治物語』の増補・改変については、主に陽明文庫蔵本を底本とする『新編日本古典文学全集四一 将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』(小学館、二〇〇二年)より史料を用いる。
- (47) 『吾妻鏡』建久元年(一一九〇)十月二十九日条に「平三真遠(出家後号鷲巢源光、平治敗軍時、為左典廐御共、廻秘計、奉送于内海也)」とある。
- (48) 日下前掲註(13)書所収「金王丸の報告談考」「後日譚部の性格」、谷口耕一「平治物語における語りと物語―義朝の東国落ちをめぐって―」(『國學院雑誌』一三三六、二〇一二年)を参照。
- (49) 京武者と地域社会の往来については、須藤聡「平安末期義国流の在京活動」(『群馬歴史民俗』一六、一九九五年)、伊藤瑠美「一一―一二世紀における武士の存在形態―清和源氏重宗流を題材に―」(『古代文化』五六巻八・九号、二〇〇四年)などにも詳しい。
- (50) 『芥民要術卷九紙背文書』(『愛知県史資料編八中世二』三一八号)。写真帖や金沢文庫本の会「名古屋市蓬左文庫蔵『芥民要術』紙背文書について(下)」(『鎌倉遺文研究』四六、二〇二〇年)を参照し、一部文言等を改めた。
- (51) 元永二年十二月七日「将軍家政所下文案」(『鎌倉遺文』九四三〇号)。
- (52) 尾張源氏については、目崎徳衛「山田重忠とその一族」(同『貴族社会と古典文化』吉川弘文館、一九九五年)、松島周一「山田重忠とその一族―承久の乱における尾張源氏―」(『日本文化論叢』一〇、二〇〇二年)、『瀬戸市史通史編上』(瀬戸市史編纂委員会、二〇〇七年)を参照。なお『史料4・5』の源姓一族は、参考までに近世の『寛政重修諸家譜』の清和源氏満政流水野の項によれば重房―重清―清房―雅経―雅繼―胤雅―と載せられ、『尊卑分脈』の小河重清以降の系譜関係が詳らかとなっている。
- (53) 『吾妻鏡』養和元年二月十二日条。
- (54) 『吾妻鏡』正治二年六月二十九日条。
- (55) 杉橋前掲註(18)論文。また落合義明は香貫郷内出土の瓦・経塚資料から、同地を大岡荘内の宗教拠点と見做している(「北条時政と牧の方―豆駿の豪傑、源頼朝からの自立―」(野口実編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第二巻 治承』文治の内乱と鎌倉幕府の成立』清文堂、二〇一四年)。
- (56) 杉橋前掲註(18)論文三三四頁。
- (57) 『吾妻鏡』治承四年八月二十七日・二十八日条。
- (58) 北条時政と牧の方の関係については、主に杉橋前掲註(19)諸論文、野口実「伊豆北条氏の周辺」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』二〇、二〇〇七)、同「北条時政の上洛」(『同』二五、二〇一二年)、落合前掲註(55)論文を参照。
- (59) 細川重男「北条氏と鎌倉幕府」(吉川弘文館、二〇一一年)。
- (60) 天神洞遺跡出土中世瓦については、原廣志「古代末―中世瓦の諸相」(小野正敏・藤澤良祐編『中世の伊豆・駿河・遠江―出土遺物が語る社会―』高志書院、二〇〇五年)、池谷初恵「伊豆・駿河・遠江」(中世瓦研究会編『中世瓦の考古学』高志書院、二〇一九年)があり、とくに本稿では資料実見を踏まえた後者の見解に拠る。

- (61) 池谷前掲註(60) 論文。こうした特徴を有する瓦の産地については、まだ確定には至っておらず今後の進展に期待したい。なお、落合前掲註(55) 論文では天神洞遺跡の半截花文軒平瓦を、北条氏と牧氏の交流を示す資料として用いている。大岡荘と香貫との交流の可能性自体は否定しないが、本文で後述するように香貫はそもそも国衙領香貫郷であり大岡荘とは別個の領域であるため、両者は分けて理解されるべきであろう。
- (62) 「金沢文庫古文書 識語編二」二二輯一〇八号(金沢文庫、一九五七年)。
- (63) 湯山学「駿河国瀬河・沼津と霊山寺―京・鎌倉往還の渡津と律僧・律寺―」(『地方史静岡』一五、一九八七年)。
- (64) (正応三年八月)二十六日「西大寺叡尊上人遷化之記」(『静岡県史資料編五 中世一』一四五六号)。霊山寺と西大寺律との関わりは湯山前掲註(62) 論文を参照。霊山寺の中世墓塔群等については齋藤彦司「駿州霊山寺と石造遺品」(『三浦古文化』四一、一九八七年)、吉澤悟「沼津市霊山寺の中世石塔群の調査」(『沼津市史研究』七、一九九八年)に詳しい。
- (65) 以上、(元徳元年)十二月十九日「定縁書状」(『本朝月令要史料紙文書』「静岡県史資料編五 中世一」一七八号)、建武五年五月二十七日「駿河国守護今川範國書下写」(『土佐国蠶簡集残篇』「大日本史料」六一四)。
- (66) 安藤孝一「駿河香貫山経塚」(『東京国立博物館研究誌』五〇四、一九九三年)。
- (67) 安藤前掲註(66) 論文。香貫山経塚の評価については今後の考古学の成果を俟ちたい。
- (68) 「陸奥新渡戸文書」(『鎌倉遺文』六九四二二号)。
- (69) 関秀夫「経塚遺文」(東京堂出版、一九八五年)をみるに、経塚造営の願主に女子が名を連ねている事例が多く認められる。一族の追善供養に女子が果たした役割の重要性が想定されるが、本稿ではその可能性を示すにとどめ、後考を期したい。
- (70) 野口前掲註(20) 書など。
- (71) 「陸奥齋藤文書」(『鎌倉遺文』一七八五六号)。
- (72) 永和三年(一二七七)十二月十一日「官宣旨」(『円覚寺文書』「南北朝遺文 関東編五」三八七二号)。
- (73) 西村隆「平氏「家人」表―平氏家人研究への基礎作業―」(『日本史論叢』一〇、一九八三年)、廣田浩治「中世前期の駿河国の在地領主・武士団」(『静岡県地域史研究』一一、二〇二二年)など。
- (74) 高橋前掲註(45) 書五五五五六頁。その他、長田忠致の本拠を有度郡長田荘とする『国史大辞典』「長田忠致」項(安田元久執筆箇所)や『吾妻鏡』の「長田入道」を長田忠致に比定する見解がある(高橋秀樹編『新訂吾妻鏡』「和泉書院、二〇一五年」)。

- (75) 元木前掲註(1) 書「保元・平治の乱を読みなす」(二一三―二二四頁)。
- (76) 「平治物語」下「頼朝義兵を挙げらるる事、並びに平家追討の事」。
- (77) 日下前掲註(13) 書。
- (78) 元木前掲註(1) 書「保元・平治の乱を読みなす」(二一三頁)。
- (79) 「熊野那智大社文書三」九一五号。
- (80) 「潮崎八百主文書」(『静岡県史資料編六 中世二』二〇〇三号)。同史料に記載される伝領関係は左の通りである。



- (81) 廣田前掲註(72) 論文。
- (82) 康治二年八月十九日「太政官牒案」(『安樂寿院古文書』「平安遺文」二五一九号)。
- (83) 同様の見解は、鎌倉前掲註(35) 論文でも示されている。
- (84) 鎌倉前掲註(8) 論文。
- (85) 元暦元年(一一八四)、捕縛され鎌倉に護送されてきた平重衡を源頼朝が接遇する際(『吾妻鏡』元暦元年四月二十日条)、狩野介宗茂の許に預けて音楽芸能に通じた「手越宿ノ君ノ長者ガ娘、千手ト申」遊女を召し出している(『延慶本平家物語 本文篇下』(勉誠出版、一九九〇年))。この遊女はすでに「兵衛佐殿ノ御前ニ此四六ヶ年被召仕進セテ候」(『同』)とあり、少なくとも頼朝の拳兵以前から仕え、かつ宗茂の許で彼女が登場することから、頼朝と手越宿遊女との関係は狩野介宗茂の仲介があった可能性が浮上する。というのも、この宗茂は伊豆国

- 有力な序工藤一族の嫡流で、かつて保元の乱では「狩野工藤四郎・同五郎」(「保元物語」)が義朝の軍勢として参戦している。狩野氏はもともと為憲流藤原氏(工藤流藤原氏)から生じた一族で、同じく伊豆国伊東氏や宇佐美氏・天野氏、隣国の駿河国では入江氏や興津氏・岡部氏、蒲原氏らも輩出し、国衙と関わりながら東海道沿線の主要な交通路に影響を及ぼしている(杉橋隆夫「国司の土着と武士団の形成」(「静岡県史通史編一 原始・古代」静岡県、一九九四年)。彼ら工藤流藤原氏の陸上交通への関与を踏まえるに、狩野介宗茂が手越宿と交流を持ったことは想像に難くない。加えて、宗茂の父茂光の時期に、伊勢国出身の加藤景員が茂光の婿を迎えられていることから(石井進「幕府の成立と源氏三代」(「静岡県史通史編二 中世」静岡県、一九九七年)、上述の推定を裏付けよう。頼朝拳兵当初から狩野一族は従軍しており、河内源氏にとって同氏は、亡父義朝以来の伊豆における重要な武士勢力であったのだろう。傍証ではあるが、手越宿周辺に鎌田氏が本拠を形成するのも、義朝による広範な武力編成の帰結と理解したい。
- (86) 西岡芳文「中世の富士山―「富士縁起」の古層をさぐる―」(峰岸純夫編「日本中世史の発見」吉川弘文館、二〇〇三年)。
- (87) 中世東海道の宿駅については、新城常三「鎌倉時代の交通」(吉川弘文館、一九六七年)、榎原雅治「中世の東海道をゆく」(中央公論新社、二〇〇八年)を参照。
- (88) 各領主の性質による地域流通・交通への関与の差異については、拙稿「西遷御家人内田氏の本拠景観と高津川流域―現地調査の聞き書きと文献史料から―」(田中大喜編「中世武家領主の世界」勉誠出版、二〇二一年)で述べたので参照されたい。
- (89) 源義朝の履歴については、主に元木前掲註(1)論文「保元の乱における河内源氏」「源義朝論」や近藤好和「源義朝―最初の武士の棟梁―」(元木泰雄編「中世の人物 京・鎌倉の時代編 第一巻 保元・平治の乱と平氏の栄華」文堂、二〇一四年)を参照。
- (90) 天養二年(一一四五)二月三日「官宣旨案」(「相模国大庭御厨古文書」平安遺文「二五四四号」)。
- (91) 前掲註(79)年未詳「長田庄知行次第写」(「熊野那智大社文書三」九一五号)。
- (92) 前掲註(82)史料。
- (93) 網野善彦「尾張国」(「網野善彦著作集 第四巻 荘園・公領の地域展開」岩波書店、二〇〇九年(初出一九八一年))。
- (94) 義朝と尾張国諸勢力との関係については、網野前掲註(93)論文および藤本元啓「藤原姓熱田大宮司家の成立と平治の乱」(同「中世熱田社の構造と展開」続群書類従完成会、二〇〇三年)を参照。
- (95) 野口前掲註(2)諸論文。
- (96) 義朝権力が地域社会の武力編成を行うにあたって、鎌倉佐保は実際に義朝本人が東国に居住したことの意義を高く評価している(鎌倉前掲註(8)論文)。
- (97) 長田忠致は保元・平治合戦での参戦がみえず、そもそも源義朝の重代の郎等であるかすらも疑わしい。むしろ本稿での指摘を踏まえるに、義朝が鳥羽院・美福門院と連携し、尾張地域で勢力を拡大するなかで形成された比較的最近の関係かと思われる。推測の域を出ないが、実際は鎌田正清を通じて利害関係で結びついていたものを、「平治物語」で両者の密接さを強調しただけなのかもしれない。
- (98) 「平治物語」下「頼朝遠流の事、付けたり盛康夢合わせの事」。
- (99) 藤本前掲註(94)論文。
- (100) 中世前期の「宿」に関する研究動向については、主に高橋修「中世前期の在地領主と「町場」」(「歴史学研究」七六八、二〇〇二年)、湯浅治久「中世的「宿」の研究視角」(佐藤和彦編「中世の内乱と社会」東京堂出版、二〇〇七年)を参照。
- (101) 高橋前掲註(100)論文。
- (102) 元木前掲註(1)論文「保元の乱と河内源氏」、川合前掲註(9)論文。
- (103) 久安二年八月十日「下総国平胤寄進状」(「樺木文書」平安遺文「二五八六号」)。
- (104) 川合康「鎌倉街道と東国武士団」(同「院政期武士社会と鎌倉幕府」吉川弘文館、二〇一九年)、落合義明「中世武蔵国における宿の形成―入間川宿を中心に―」(同「中世東国武士と本拠」同成社、二〇二〇年(初出二〇〇八年)など)。
- (105) 湯浅治久「中世武士の拠点と陸上交通―千葉氏一族を事例として―」(高橋修「実像の中世武士団」高志書院、二〇一〇年)。
- (106) 網野善彦・笠松宏至「中世の裁判を読み解く」(学生社、二〇〇〇年)。
- (107) 木村茂光「建久六年頼朝上洛の政治史的意義」(同「初期鎌倉政権の政治史同成社、二〇一一年(初出二〇〇二年)、高橋典幸「鎌倉幕府と東海御家人」(同「鎌倉幕府軍制と御家人制」吉川弘文館、二〇〇八年(初出二〇〇五年)、勅使河原拓也「治承・寿永内乱後の東海地域における鎌倉幕府の支配体制形成―頼朝上洛に着目して―」(「年報中世史研究」四二、二〇一七年)。
- (108) 高橋前掲註(107)論文。
- (109) この先駆的な取り組みとして、野口前掲註(2)論文「相模国の武士団」や同前掲註(21)論文「京武者」の東国進出とその本拠について―大井・品川氏と北条氏を中心に―などがある。ただし京都政界と本拠形成の連動を重視する一方で、地域社会の実像はやや抽象的で、本拠をとりまく政治的・経済的・文化的環境の復元を踏まえ、地域秩序の実相のなかで捉え直す点で課題を残す。仮に京

都政界の強い影響があろうとも、京―本拠という単線的関係で自己完結するわけではなく、また本拠が地域社会のなかでスタンドアロンな存在であるはずはない。当該期の本拠を取り巻く地域社会像の検証も、京武者をはじめ院政期武士論の進展を踏まえつつ一層の深化を図る必要がある。

【付記】

『山内首藤家文書』の調査・撮影に際して、山口県立文書館のご高配を賜った。記して御礼申し上げる。また、本稿は筆者が担当した二〇二二年度秋季特別展『永福寺と鎌倉御家人』（神奈川県立歴史博物館（会期：二〇二二年一〇月一五日～同年十二月四日）における事前資料調査で得た研究成果の一部をまとめたものである。

（神奈川県立歴史博物館、国立歴史民俗博物館研究協力者）
（二〇二二年一月二一日受付、二〇二三年三月三一日審査終了）

MINAMOTO no Yoshitomo's Regional Foundations and Bases of Samurai : In the Case of KAMATA Masakiyo, Who was the Number One Vassal for Yoshitomo and Tokai Region

WATANABE Hiroki

This paper examines the formation process and characteristics of the regional foundations that supported MINAMOTO no Yoshitomo's authority, by describing the case of KAMATA Masakiyo who was the number one vassal for Yoshitomo. It is clarified by examining his activities, basement in Tokai region and relationship with local lords. The conclusion is roughly as follows.

The KAMATA clan who was from Kyoto was based in Kamata-go Village of Suruga Province, and gradually established additional bases in Kanuki-go Village in the lower area of the Kano-gawa River basin. And he began to interact with the HOJO clan in the middle area of the Kano-gawa River basin. The cooperation with the OSADA clan, who was based in Osada-no-sho Manor in Suruga Province as a local lord, was needed for the KAMATA clan's regional activities. The OSADA clan was based in the lower area of the Abe-gawa River basin in Suruga Province, encompassing the main post town of Tokaido in the medieval within its sphere of influence, the OSADA clan expanded its communication network to Noma-Utsumi-no-sho Manor in Owari Province of Chita Peninsula and the Kai and Izu regions. MINAMOTO no Yoshitomo planned to commit to Tokaido traffic through the KAMATA clan by forming a kin relationship between the OSADA clan, who was a wealthy clan, and the KAMATA clan, who was the head of the clan.

However, the relationship that Yoshitomo formed in the Tokai region through the hubs of regional transportation bases and cooperation with various authorities was not very reliable. Relations that depended on local lords always had the possibility to collapse easily due to conflicts of interest between them. Yoshitomo's seemingly wide-ranging relationship was actually a superficial relationship that relied on the power of local lords. On the other hand, the relationship between the next-generation Kamakura Shogunate and Tokaido traffic was different from that of the Yoshitomo's case, so developments by the Kamakura Shogunate authority, such as the establishment of post town and the elimination of local lords, progressed.

Key words: MINAMOTO no Yoshitomo, KAMATA Masakiyo, OSADA Tadamune, Tokaido traffic, Kanuki
